



緑の架け橋

会報第19号

2012年01月01日

10周年を迎える「緑の架け橋」の活動 ～一滴が大河へと繋がるように～

10周年記念植林緑化派遣団に御参加を呼びかけます。



三期目の中寧県の模様 (11・9・24)

緑の架け橋プロジェクトの経過

2002年11月 緑の架け橋推進センター設立。これは日中緑化交流基金の助成を得た事業主催・IFCC国際友好文化センターの呼び掛けに依るもの。

プロジェクト名	事業実施期間	植林面積
寧夏紅寺堡生態緑化プロジェクト (済)	2002年度～2004年度	330ha
寧夏・日中青年平羅県生態緑化林事業 (済)	2004年度～2006年度	290ha
日中青年寧夏中衛生態緑化モデル林事業 (済)	2005年度～2007年度	300ha
日中青年銀川生態緑化林事業 (済)	2007年度～2009年度	180ha
日中青年石嘴山生態緑化林事業 (済)	2007年度～2009年度	250ha
寧夏中寧県日中青年生態緑化モデル林事業 (済)	2008年度～2010年度	300ha
寧夏吳忠市太陽山開発区日中青年生態緑化モデル林事業 (継)	2010年度～2012年度	210ha
日中青年石嘴山市恵農区生態緑化モデル林事業 (継)	2010年度～2012年度	220ha
日中青年河北遷西県生態防護林 (新)	2011年度～2013年度	157ha

2008年11月 緑の架け橋推進センター解散。その後、「緑の架け橋」の活動は、事業主催のIFCC国際友好文化センターの元で「緑の架け橋プロジェクト」として継続される。

2010年まで8つのプロジェクトを実施。6プロジェクトは終了。2プロジェクト継続中。

2011年度から、河北省でも新規1件のプロジェクトをスタート。よって、現在3プロジェクトを実施中。訪問団は第16次までで183名。

IFCC 国際友好文化センター



緑の架け橋プロジェクト

中国植林緑化活動協力事業

〒162-0801 東京都新宿区山吹町333 辻ビル405 TEL. 03-3268-4387 FAX. 03-3268-6079

口座：中央労働金庫市ヶ谷支店 (普)0858119 郵便：00130-9-425994

本会報は事業主催 (IFCC) の植林プロジェクト特集となります

日中緑化交流基金による助成事業の経過

- 1998年 長江流域などで大洪水の発生 中国政府は樹木の伐採禁止措置
1999年 小淵総理訪問 10年間で100億円の植林のための基金設立構想を表明、両政府間で取り決め
(日中民間緑化協力委員会の設置)
2000年 支援事業開始
2010年 2009年度は81プロジェクト
2000～2010年(10年間)までの植林面積は延べ42千ha。総支出額50億円
(日本で植林した場合の概算経費: 42千ha×500千円/ha=210億円)

中国森林の現状

森林面積1億5,900万ha、日本国土面積の4.3倍、森林率16.5%、世界の森林の約4%を占める。
砂漠化面積は2億6,200万ha、日本の約7倍にのぼる。
中国の6大林業政策・・・天然林資源保護、防護林建設、野生動植物保護、用材林基地建設など。
2050年までに森林率26%以上、50年間で1億haの植林を目標。

植栽箇所状況

今回植林を行う3箇所についての地域の特徴は次のとおりとなっている。
標高は1,260m～1,500m。地形は平坦で、高低差2～3m。土地は荒山が多く、土壌は白僵土、灰色土と風沙土からなる。Ph値8.5前後。典型的な大陸性気候で、十分な日が照り、光エネルギーが豊富で、乾燥して雨が少なく、風が強く砂が多い。温度差が大きく、冬は長く寒く、夏は短く暑い。年間平均気温8.4℃、年間平均降水量200mm前後(7、8、9月の3ヶ月に集中)し、主な災害としては乾燥、霰、霜、砂嵐、乾熱風等がある。年間の降水量が非常に少なく、日本の1/10程度である。

第16回植林緑化派遣団(2011年9月23日)

報告: 秋田 小笠原 正太

はじめに

東日本大震災への復興が少しずつではあるが歩みはじめた中、第16回目を迎える植林緑化派遣団は8名の参加により3か所での植林活動を実施してきた。
中国への訪問が初めてということで若干の不安はあったが、仕事が林業関係ということもあり植林についてはとても興味深いところがあった。

9月22日(木) 事前学習会及び結団・壮行会

東京麹町のホテルにて、事業の経過とプロジェクトの概要及び植林活動の現状について学習、説明を受けた。

9月23日(金) 東京⇒北京⇒銀川

早朝、成田空港から北京行きの飛行機で3時間のフライトを経て北京空港に到着。スルーガイドの劉さんと合流し、昼食を兼ねた食事の後、北京空港から国内線にて銀川空港へ移動。銀川空港到着後、市内にて夕食を済ませ車にてホテルへ向かった。
ホテルへは午後9時過ぎに到着した。時差は1時間しかないため、さほど気にはならなかったが移動の疲れと、翌日からの植林に備え早めの就寝となった。

9月24日(土)

中寧県生態緑化モデル林事業(3期目)

1箇所目の現地に到着すると、大学生と地元関係者約60人が迎えてくれた。

3カ年計画で今年度末までに300haを植栽する計画



になっており、今期の植樹規模は100haである旨の説明を受け、植樹を行った。

砂の砂漠を想像していたが現地は少し違って、日本でいったら小学校のグラウンドが荒れたような状態で、下層植生としては草類がまばらに生えていた。現地の話では、今の時期だけ草があるようで、年間のほとんどは草もない状態であるようだ。

植栽樹種は、ヤナギ、ポプラ、エンジュ、リンゴ、クコ等の樹種で、幅1.0m・深さ0.5m位の植え穴に2m位の樹木を1m×4mの等間隔で植栽した。埋め戻し後は水鉢を作り、少ない降雨に対処するための工夫が伺えた。保育管理としては、4月～8月頃の適時に散水するとともに施肥や剪定を予定していた。

現地の厳しい自然条件を踏まえて、パイオニア種であるヤナギ、成長が早く活着の良いポプラ、豆科のエンジュなど樹種には適切なものが選定されていた。又、経済林としての利用を目的にリンゴやクコを植栽するなどの発想には驚いた。雨が少ないことを考慮すれば、もう少し小さい苗木を選定した方が活着率の向上につながると思われたが、散水を実施することにより水問題をクリアするとともに、早期の樹林化を目指しているようだ。

次の植栽箇所に向かう途中に、過去に植栽した所を見せていただいたが苗木は4m位までに生長し、しっかり大地に根付いていた。

呉忠市太陽山開発区生態緑化モデル林事業（1期目）

現地に向かう途中には風力・太陽光発電の巨大な施設があり、自然エネルギー政策を積極的に進めて



いる中国政府の取り組みが伺えた。

2箇所目の植栽地では地元関係者やテレビなどのマスコミが迎



えてくれた。3カ年計画で2013年までに210haを植栽する計画になっており、今期の植樹規模は100haである旨の説明を受けた。又、コストについては、ニセアカシア苗木代26元（312円）、ポプラ苗木代27元（324円）、牛よけのため石灰を樹皮に塗布。通常は3日に1回の散水を行い、1本の木に約0.12リットル使用し0.74元（8.88円）かかるようで、1年間で1本の木に80元（960円）の経費がかかるようである。

今回の植栽樹種は、ニセアカシア、ポプラ、クロマツ等の樹種で、幅1.0m・深さ0.5m位の植え穴に2m位の樹木を3m×3mの等間隔で植栽した。

同地区で春植えを行った箇所について視察した際に、活着した植栽木の周りにたくさんのニセアカシアの実生芽や根萌芽が発生していた。独占種で他の樹種を寄せ付けない傾向にあるこの種は数年後には、一面ニセアカシア林になっていると思われる。また、同地区は活着率も88%と非常に高い。

伝え聞くは親しく見るにしかず（抜粋）

野村 昌弘

—それにしても「伝聞不如親見」（荀子 儒効篇）であった。

2002年に政府の日中緑化基金の助成事業として「緑の架け橋センター」がスタートした時に会員となり、壮行会や会報などでは現地の状況を聞いたり、読んだりしてきた。しかし、自らの瞳で植林地区を視たり、管理 作業員から直接話を聞いたり、そして土壌や苗木に触れ、「1本柄」のスコップで穴を掘り、ボランティアの学生と植樹を体験できたことは、まさしく伝聞より素晴らしい事であったし、自らの植樹は僅か数本であったけれど、この事業や今日の中国を理解するうえで、多くの事を学ぶことができた。—

—さらに、今回補植を協働した大学生ボランティア、中高生、作業管理者の家族の方々との直接交流が出来なかったことは残念だったが、自然保護、生態環境の改善教育というカウンターパートナーである中華青年連合会の事業目的とその実践の一端を知ることができた。—

9月25日(日)

石嘴山市恵農区生態緑化モデル林事業(1期目)

3箇所目の現地に着くと、小学生と地元関係者が迎えてくれた。3カ年計画で2013年までに220haを植栽する計画になっており、今期の植樹規模は防風防砂林として60haである。地帯は地元業者に発注し、その後の植栽はボランティア、保育管理は現地農民が実施する旨の説明を受けた。



黄河に隣接している今回の植栽箇所は他の箇所と違い、下層にヨシなどが多数生育していた。

しかし、土壌条件については、前日までの箇所とほぼ同様な状況の荒地であった。

植栽方法も他とは違い、植え穴はスジ状に掘られておりそこに、ヤナギ、ニセアカシア、ナツメを植栽した。散水はスジ状に掘られた部分にポンプ車を使って水を入れる仕組みで、スジ状の部分が水路となり水が流れる予定になっている。

今回3箇所の植林現場を見た私なりの所感としては、次の3つが課題になるのではと思われる。

- 1) 苗木をもう少し小さくすることにより活着率の向上、経費の節減が図られるのでは。
- 2) 将来、植栽木が生長した際の気象・病虫害等に対して、積極的に植栽木の混植を進めるべきでは。
- 3) 砂嵐や強風対策として植栽とセットで、防風工や静砂工及び堆砂工を施工するべきでは。

しかし、上記についてはあくまでも日本国内での季候や土壌条件での話であり、必ずしも今回の植栽箇所に該当するとは限らないため、何年後かの現地を是非見てみたいと強く感じた。

中国側の実施している植栽については、地元住民だけの取り組みではなく、中国政府や各種関係団体等が積極的に取り組んでいることから、課題等はすぐにクリアされ、近い将来、現在の砂漠は眼下一面の森林になっていると思われる。

9月26日(月) 銀川⇒北京

早朝の便で、3日間滞在した銀川から国内線で北京にフライト。

9月27日(火) 北京⇒東京

早い時間に朝食を済ませ、北京空港へ移動して日本へ帰国した。

今回は天候にも恵まれ、参加者がだれも体調を崩すことなく、多くの中国側での関係者と交流も深められた。26元(312円)の苗木1本の植栽が、最終的には地球規模での環境問題に貢献できるような壮大なプロジェクトに今回参加できてとても良かった。

最後になるが、今後の「緑の架け橋プロジェクト」に注目するとともに、少しでもこのプロジェクトに協力できたことを誇りに、植林事業の成功を祈願します。

緑の架け橋植林活動に参加して(抜粋)

齊藤 由宣

一植林緑化派遣団の壮行会に送り出す側として数回参加をさせてもらった。参加者は事前の学習をして、植林に臨んで行ったところですが、私は学習後の壮行会だけに出席をしてきたところ。そこでは若干のスライドと説明を受けただけでしたが、ほんとうに、荒野? 砂漠? で木が育つか素朴な疑問を持ったものでした。いつかは自分の目で確かめてみたいと思っていましたが、この度、その機会を得ることができました。一

一現地の土壌は予想していたより劣悪な状態でした。風が吹けば表土は簡単に飛ばされそうでした。実際、植林の記念に石の記念碑が設置してあり、植林の趣旨や参加者の名前が石に刻み込まれていましたが、砂あらしで、その刻まれた文字が薄くなっており、気候の凄まじさが感じられました。そのような中での維持管理は相当大変なものとなっていますが、地元の人々の努力で植林された木は育っています。

植林されている木の種類は、ポプラ、柳、棗、クコ、林檎などで、特に実のなる木は、地元の人々の現金収入に寄与しているそうです。緑化とともに地元の経済活動にも一役かかっていました。一

【2010年度活動報告】

2008年度（2008年11月）以降、「IFCC緑の架け橋プロジェクト」として世話人会をつくり、植林緑化活動の継続を進めてきました。2010年度（2010年11月～2011年10月）は、「寧夏中寧県日中青年生態緑化モデル林事業」の三期目（100ha、123,000本）、「寧夏吳忠市太陽山開発区日中青年生態緑化モデル林事業」の一期目（70ha、79,000本）、「日中青年石嘴山市惠農区生態緑化モデル林事業」の一期目（60ha、350,000本）をそれぞれ実施してきました。

派遣団は第15回（2011年4月15日～19日、4人参加）、第16回（2011年9月23日～27日、9人参加）の2回を実施。

会報は2011年1月に17号、同年7月に18号を発行。

2008年度から「IFCC緑の架け橋プロジェクト」へと移行し、協賛金を呼び掛けてきましたが、これまでの会費制と異なり、大幅に賛同者が減少してしまいました。あらためて趣旨を呼び掛け、協賛を募っていきたいと思います。

【2010年度収支報告】（実績10年11月30日～11年11月29日）

収 入			支 出			
費目	実績 (円)	摘要	費目	予算 (円)	実績 (円)	摘要
繰越金	0		事務所間借代	240,000	0	240,000 未払い
協賛会費	126,000		通信・送料		31,300	60,000 未払い
植林協力金	120,000	15回, 16回派遣団	事務局費		426,256	
寄付金	1,000	IFCCより	事業費		1,163,880	派遣費補填
賛助金	720,562	参加者より	印刷代		221,515	会報2回含む
助成金①	830,080	派遣経費、基金より	備品・消耗品		6,029	
助成金②	530,080	事務経費、基金より	返済金		720,562	一部未払い
会場費	74,000	学習会参加費	未払金		201,769	09年度借入、FCCへ
借入金	368,669	IFCCより	郵便振替手数料		0	
雑収入	1,420	団費余剰分	雑費		500	
合 計	2,771,811				2,771,811	

【2010年度貸借表】 単位・円

貸 方				借 方		借方の説明	
通帳	0	郵便振替	0	返済金	618,669	立ち上げ資金	250,000
現金	0	助成金	0	自己資金	720,562	10借入金	368,669
計	0			未払い金	300,000	09石嘴山	428,505
				計	1,639,231	09銀川	394,145
						09中寧県	502,589
						事務所代	240,000
						通信費	60,000

【今後のIFCC緑の架け橋プロジェクトによる活動計画】

I. 会報「緑の架け橋」の年2回の発行

II. 協賛呼びかけ

協賛会員を呼びかけ、登録をしていく。協賛金の目安は個人一口×3000円、団体一口×30,000円ですすめる。

第16回 植林緑化派遣団に参加して（抜粋）

皆川 和広

—3月11日の東日本大震災により被災地の避難所業務に対応していたため第15回植林緑化派遣団に参加できず、今回の16回目を迎える緑陰緑化派遣団に参加することが実現した。—

—訪問先での一番の印象に残った場所は、吳忠市太陽山開発区で、4月に植林された現地視察に移動する最中のこと。太陽山に近づくにつれ、巨大な風力発電装置がいくつも現れ、太陽光発電の巨大な設備が整備されていた。これは福島第一原発の事故で、「原発は安全で安心である」という安全神話の虚偽を暴き、「核と人類は共存できない」という私たちの主張が正しかったことを証明され、原子力に頼らない再生可能な自然エネルギーの転換を求められている今、タイムリーな設備に感動を受けた。

Ⅲ. 植林協力金の要請

植林活動参加者1人の植林協力金を10,000円として要請する。

Ⅳ. 植林緑化派遣団の実施

2012年は、緑の架け橋推進プロジェクトが活動を開始して以来、10周年を迎えることとなります。

また、日本と中国の「国交正常化40周年」の年でもあります。「緑の架け橋」が平和と友好の架け橋になるよう記念の植林緑化派遣団を組織したいと思っております。

第17回 2012年4月13日(金)～17日(火)

日中青年河北遷西県生態防護林事業 1年目
日中青年石嘴山市恵農区生態緑化モデル林事業 2年目
寧夏呉忠市太陽山開発区日中青年生態緑化モデル林事業 2年目

第18回 2012年9月21日(金)～25日(火) 予定

石嘴山恵農区、呉忠市太陽山、河北遷西県における捕植活動

【2011年度 プロジェクトの事業計画】(2011年11月～2012年10月)

区分	日中青年河北遷西県生態防護林		寧夏呉忠市太陽山開発区日中青年生態緑化モデル林事業		日中青年石嘴山市恵農区生態緑化モデル林事業		摘要
	事業経費(千円)	内容	事業経費(千円)	内容	事業経費(千円)	内容	
植林	8,306	1200000本(45ha)	13,865	767000本(70ha)	11,660	540,000本(80ha)	苗木購入、植え付けなど
保育	1,675	灌水・農薬散布・施肥等	1,225	除草・施肥・農薬散布等	3,675	除草・施肥・農薬散布等	灌水施肥農薬散布獣害防除
機材調達	744	農薬散布器、ホシ、肥料等	250	消火器、肥料等	2,773	消火器、肥料等	造林用作業具、農薬散布機等
基盤整備	638	灌漑設備等	3,063	水路	821	灌漑設備等	灌漑水路整備
事務経費	650	通信・印刷等	850	通信・印刷等	650	通信・印刷等	
技術者派遣	700	派遣旅費等	700	派遣旅費等	700	派遣旅費等	
その他	1,213	測量計画費等	715	技術指導等	2,475	測量計画設計費	助成経費以外の経費
合計	13,926(内、助成9,600)		20,668(内、助成10,900)		22,754(内、助成12,800)		

【第16回植林緑化派遣団参加者】



佐藤晴男	プロジェクト代表
鈴木喜久夫	大分
渡邊忠之	大分
野村昌弘	広島・自治労
齋藤由宣	新潟・自治労
皆川和広	新潟・自治労
夏秋俊男	佐賀・自治労
小笠原正太	秋田・自治労
篠原尚	IFCC事務局

※順、不同

第16回植林緑化派遣団に参加して (抜粋)

夏秋 俊男

一事前学習会で日中緑化交流基金の経緯や中国の森林の現状等を知り、大変壮大なプロジェクトが行なわれていることを知り、その事業に参加できることに大変光栄なことだと思い現地視察にのぞむことが出来ました。一

一植樹では、現地の大学生をはじめたくさんの現地の方と楽しく植樹が出来ました、言葉は通じないのですが、同じ作業をすることで、現地の方との距離も少し縮まった気持ちになりました。

今回植えた木の中にはクコの実など、育つと実がなり、それを収穫して収入を得ることも出来るといった、現地の方の生活環境にもプラスが働くものもあり、ただ砂漠化をとめるだけではなく、現地の方の生活にも影響するすごく有効な事業であることも実感できました。一